

福島県障がい者芸術文化活動支援センター



はじまりの美術館

2020年度事業報告書



トークイベント「福祉とアートは類似しているか!？」

映画「うたのはじまり」上映会&手話トークイベント

cento-シエント 福祉と表現にまつわる研修会2020

福島市で きになる ⇄ まちなか美術館

unico file vol.3 みんなが知らない土屋康一／わたしが知ってる土屋さん

TABLE OF CONTENTS

目次 2

支援センター事業について 4

相談事業について 6

トークイベント「福祉とアートは類似しているか!？」 8

映画「うたのはじまり」上映会＆手話トークイベント 12

cento- シエント 福祉と表現にまつわる研修会 2020

シエントについて 13

1 全国の活動を知る 14

2 表現活動のヒントや制作方法を知る 16

3 商品化のヒントや広報を知る 18

4 インターネットでの発信やアーカイブの方法を知る 20

総括 22

福島市で きになるまちなか美術館 23

unico file vol.3 みんなが知らない土屋康一／わたしが知ってる土屋さん 26

福島県障がい者芸術文化活動支援センター

はじまりの美術館

2020 年度事業報告書

はじまりの美術館

はじまりの美術館は2014年6月に開館し、2019年度より福島県障がい者芸術文化活動支援センターとしても活動をはじめました。福島県内の障がいのある方々が自分らしく表現活動を行えるよう、また障がいのある方の表現活動にかかわる方々と一緒に悩み・考え、より良い方向へ向かえるよう、少しでも力になっていければ幸いです。

2020年度の活動について

はじまりの美術館が支援センターとして2年目となる2020年度は、「人と人のつながり」に関して、多様な観点で考える一年となりました。新型コロナウイルス感染症が拡大していく状況下でのスタートとなった年度当初、その脅威がどの程度のもので、どのような予防策を講じればよいのかといった基本的な情報も乏しい状態が続きました。これを受け、はじまりの美術館も休館を余儀なくされ、見込んでいた事業も大きな見直しが必要となりました。

中でも実施方法を大きく転換したのが、トークイベントや研修会です。初年度に実施したアンケートをもとに、福島県内の関係者が抱える課題やニーズに応じた企画を準備し、いずれも他県で先駆的な研究や取り組みをされている方々をゲストとして招聘する予定でした。しかし、県をまたいでの移動がはばかれる状況もあり、オンラインを活用した開催方法を模索しました。結果、トークイベント「福祉とアートは類似しているか!？」は無観客でのYouTube配信、研修会「cento-シエント」は4回全てをZoomでの開催としました。

なお、映画「うたのはじまり」上映会&手話トークイベントに関しては、規模を縮小し、対策を講じて実施が叶いました。

また、情報発信にもSNSを活用しました。noteでは「展覧会に行く」「情報を知る」「研修を受ける」の項目別に情報を集め、公募展情報を中心にTwitterで随時手元に届ける工夫をするなど、その用途に応じて使い分けました。

美術館内で開催するイベントに参加できる人数は多くても30人ですが、トークイベントを配信したYoutubeの視聴回数は900回を超えました。またシエントは、全国の参加者同士の交流の場にもなりました。今回、オンラインを活用することで対面では出会えなかった人たちとつながり、情報を届けることができました。今後も、同じ空間で出会うことの良さと、オンラインでつながる可能性と、それぞれの良さを活かした取り組みができればと考えています。

はじまりの美術館 館長 岡部兼芳



支援センター事業の取り組み

こんなときにご活用ください！



「相談する」

福島県内で、障がいのある方の表現活動に関するアドバイスや、作品の展示等について相談や情報提供を行います。また著作権等の権利保護に係る専門的な相談にも、弁護士などと連携し対応します。

相談したいことや
気になったことがある際は、
ぜひはじまりの美術館まで
ご連絡ください。



「研修を受ける」

障がいのある方の表現活動を支援するご家族や施設職員、また関心のある方を対象に、著作権等の権利保護や、作者との関わり方などをテーマとした研修会を開催します。

POINT!

この報告書では、2020年度に行なった事業を「相談する」「研修を受ける」「発表する・鑑賞する」「ネットワークを広げる」「情報を知る」の5つのタグをつけてご紹介しています。



「発表する・鑑賞する」

福島県内に在住の障がいのある作家の調査を行うとともに、展覧会を企画・開催し、表現の多様性と魅力を広く伝えます。



「情報を知る」

福島県内、ならびに他県の障害のある方の表現活動にかかわる情報を収集し、ホームページ、SNSなどで発信を行います。2020年度は、noteやtwitterなどで公募展情報や展覧会の情報の発信などを行いました。



「ネットワークを広げる」

福島県内、近隣エリアの関係機関や関係者が、情報共有・意見交換を行う場を設け、ネットワーク化を図ります。

相談事業について

今年度の相談について

2020年度は、22件の相談がありました。新型コロナウイルス感染症拡大防止のためはじまりの美術館が2020年3月30日から7月10日までの期間休館をしていた影響もあり、この間の相談はほとんどありませんでした。相談は、直接来館いただいたの相談のほか、メール、電話、またZoomを用いたオンラインでの対応も行いました。また福島県内の方のみならず、今年は新潟県・北海道・関東地方などの方からの相談やお問い合わせがありました。

相談事例のご紹介

作者の方から

Q 機関誌の表紙絵などにチャレンジしてみたいので、情報が知りたいです。

A 『手をつなぐ』や『働く広場』などで定期的に募集されているようです。ホームページや機関紙を見て情報をご確認ください。また、様々な公募情報が掲載されているサイトもありますので、そちらもぜひご覧ください。

Q 作品の価格設定について知りたいです。「作品を欲しい」と言っていたときに、きちんと対応できるよう、自分の作品の値付けができるようになりたいです。

A 価格は、作品サイズ・制作時間・画材等の原価・作者の方の経歴などから総合的に決めるとよいでしょう。主には下記のような方法があると思います。

- ①画材の原価＋制作時間＋額縁＋αで計算・設定する
- ②絵画作品で新人の場合、1号あたり3,000～5,000円で設定する
- ③どうしても自分で決められない場合は、購入希望者に決めてもらう

Q 制作の方向性や、作品の管理、販売など、他の作家さんをみているときちんとしているように感じます。私もどこかのタイミングで整理をしたいと思っており、アドバイスをいただきたいです。➤



A 一つの方法として、制作や自分の表現に関して思っていることなどを文章として書き出してみたいかでしょうか。日々考えていらっしゃる事が整理できて、自分がやってきたことの道筋が見えたり、新たな制作のきっかけなどが見つかるかもしれません。(相談者の方はポートフォリオを制作していたので、その中に文章を掲載するとよいのではとお伝えしました。)

Q 精神障がいがあっても、創作したものでお金を得ることは可能でしょうか？可能な場合、こういった方法ですか？個人で活動しており、インターネット上のサービスで収益を得たいのですが、現状難しいです。

A 作品をもとに収益を上げるには、

- ①自身が自由に描いた原画を販売する
- ②依頼されたものを描いて原画を販売する
- ③絵やイラストを「素材」としてデータで販売する
- ④絵やイラストを元にグッズや製品にして販売する
- ⑤広告収入を得る

の5つのパターンがあると思います。複数の方法に取り組んだり、SNSなどを活用することが望ましいです。また、販路拡大や製品化は一人では難しい場合もあるので、コラボレーションできる企業や団体などを探すのも良いと思います。

福祉事業所の方から

Q 利用者の方の作品をもっとよくしたいのですが、どうしたらよいでしょうか？

A 「作品をよくしたい」という想いはよくわかりますが、一番は作者の方（利用者の方）が楽しく活動できることではないかと思います。例えば、色鉛筆での制作が今一番楽しいのであれば、他にはどのような可能性があるのか、新たな画材を提案してみるのの一つの手ではないでしょうか。また、言語でのコミュニケーションができる方だと、モチーフに関しても何を描きたいか聞いたり、会話のなかで作者の関心を引き出すやりとりがあってもよいのではないのでしょうか。

Q 作者がすでに亡くなられ、意思が確認できない場合の作品売買についてお伺いしたいです。作品の購入希望があったのですが、作品を販売して利益を得てもいいのでしょうか？遺品を整理していた際、遺言証書作成のためにかかわっていただいた司法書士の方からご家族に確認したところ、「作品は処分してもよい」と言われたと聞いています。

A 相続・所有権の問題になるため顧問弁護士へ相談させて頂きました。顧問弁護士によると、今回作品を販売する

個人の方から

Q 住んでいる地域で、アール・ブリュットのアーカイブを作りたいと思っています。アーカイブに関して、参考になる取り組みや資料を教えてください。

A 京都や福島では、地域の作家のアーカイブが作られています。はじまりの美術館の姉妹館の「みずのき美術館」では、2015年から先進的にデジタルアーカイブの活動が行われています。インターネット上でインタビュー記事などが掲載されています。また、みずのき美術館、はじまりの美術館、鞆の津ミュージアムの3館は、2017年・2018年に協働してアーカイブ事業を行いました。その成果としてハンドブック『「どうしよう」からはじめるアーカイブ』をPDFで無料公開および冊子を販売しております。また、必要に応じてZoom等で個別に相談に乗ることも可能です。

Q 学生です。関東で福祉関係の方との関わりを作りたいです。福祉事業所を紹介してほしいです。

A 事業所によって特色や大切にしていることも異なるため、展覧会やトークイベント、メディアなどの記事を通してリサーチされると良いと思います。希望のエリアの「支援センター」へ相談してみるのも良いと思います。

場合、相続人であるご家族の方との書面の取り交わしが必要です。「所有権・著作権に関して、事業所に譲る」という内容になるといいのでは、とのこと。事業所として非売の所蔵作品を決めておき、それ以外は希望があればお譲りするなどの方法が取れると思います。エピソードのある作品などを中心に保管されるとよいのではないのでしょうか。

NPO 法人の方から

Q 病院の中で作品の展示を行う予定です。美術館内や別の場所で展覧会をする際に、借りた作品が破損してしまった場合の作品に対する補償・保険について知りたいです。

A はじまりの美術館の場合、企画展毎に総合動産保険に加入しています。また、「まちなか美術館」のように複数会場で実施の場合は上記保険では対象にならなかったため、他社の総合動産保険を使って実施したこともあります。

Q はじまりの美術館の方に勉強会でお話いただくことは可能でしょうか？

A 事前に勉強会の趣旨等をお伝えいただき、お打ち合わせいただければ検討可能です。

また、外部の人として関わるか、内部に入って関わるか、相談者の方のコラボレーションの仕方について事前に検討するとよいのではないかと思います。

当センターでの相談後、自身の活動や作品を発信・蓄積するためにSNSを新たに始められた方や、情報提供した公募展に応募して入選された方などもいらっしゃいました。言葉にして相談することで、自身の悩みや活動を整理する方法の一つになるのではないかと思います。

ご相談窓口

はじまりの美術館 無料相談窓口

TEL：0242-62-3454

(受付時間 平日 10:00～18:00 ※火曜・展示入れ替え期間中休館)

Mail: soudan@hajimari-ac.com

※直接はじまりの美術館にご来館いただいたの相談も可能です(要事前予約)

表現活動の支援ページ▶



福祉とアートは類似しているか!?

研修を受ける

情報を知る

ネットワークを広げる

登壇者：木ノ戸 昌幸（NPO 法人スウィング 代表） 鈴木 励滋（生活介護事業所カブカプ 所長）

進行：岡部 兼芳（はじまりの美術館 館長）

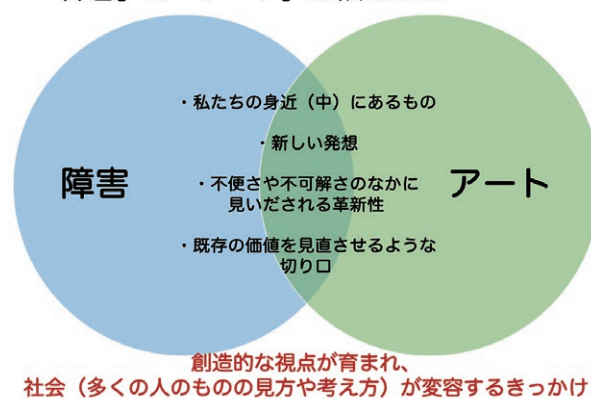
参加費：無料 参加者数：約 100 人（Youtube でオンライン配信） ※ UD トークによる情報保障付



京都・NPO 法人スウィングから木ノ戸昌幸さん、神奈川・カブカプから鈴木励滋さんをお招きし、トークイベントを開催しました。新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、当日は参加者は会場に入れずオンライン（Youtube）で配信する形態をとり、リアルタイムでは約 100 名の方にご参加いただきました。

前半は、木ノ戸さんからスウィングでの取り組みについて、鈴木さんからカブカプの取り組みについてお話いただきました。後半は、進行の岡部より「福祉とアートの類似性」についてゲストのお二人に投げかけをし、そこからクロストークを行いました。終盤、チャット欄や質問シートからの質疑応答も実施しました。終了後のアンケートでは、31 件の回答がありました。全国各地からのご参加があったことなどがわかり、内容に関して 77.4% の方が「とても満足」22.6% の方が「満足」と回答いただきました。

「障害」と「アート」は似ている



▲岡部のスライド

「障害とアート」、「福祉とアート」

岡部

お二人のお話からは、いつも刺激をいただいております。ここから対話の口火として、今日のタイトルにもつながる「障害とアートは似ている」と感じた経緯について私からお話しさせていただきます。

もともと私は福祉の現場で知的障害の方たちと関わってきましたが、美術館をはじめるとき、「障害」と言うよりも“アート”のほうが入りやすいのではないかと思いました。ただ実際に関わってみると、実はアートも「ちょっと特別で近寄りがたい」とか、「アートや美術には関心がないから苦手」という声もあったんですね。その声を聞いたときに、「障害とアートは似ている」と思いました。障害のイメージも、「大変そう」とか「かわいそう」とか「何だかわからない」といった言い方で、自分とは違うと思っている。つまり、両方とも言葉では知っているけど、イメージが先行しているだけで、実はよく知らず興味がなければ自分とは関係ないと思っているんだと感じます。

さらに障害やアートには、不便さや不可解さのなかに生み出される革新性だったり、既存の価値観を見直させるような切り口だったり、人の視点を切り替える可能性があります。そういうところでも似ているなと思いました。お二人の話は、そこに揺さぶりをかけていくお話だと感じ

見方を変えるばかりではなく、いろんな観点をひっくりかえしてしまうこともある。でも、そこに「幸せ」としての福祉が重なっていくことがすごく良いと考えています。福祉には、人に価値の変化を問いかけていく直接的な力というのは、まだまだアウトプットとしては少ないのかもしれない。それがアートに出会うことで投げかける力も増していくと思います。

鈴木

福祉は「幸せ」という意味合いが大きいと思っています。「人間のしんどさを緩める」とか「幸せと一緒に探す」というか。人それぞれ感じ方が違う幸せは、「支援計画とかでは基準にはならないよ」みたいに言われます。ですが、もうそれは正解があるんじゃないくて、より良い形を探すしかない。だから、アーティストは別に何かのためでもなく、なんかもう本当に衝動で今までにないものを作っていく力がある人たちなので、福祉にはとてもそれが必要で親和性が高いと思っています。

特に障害がある人たちは何か違いがあるってだけで、ずっとマイノリティーなわけですね。主流の価値観があまりに強いこの国では、同じでなくちゃいけないって同調圧力も強いので、もうみんな空気を読みあって生きづらい。➤

ておりました。そういう視点をたくさん引き出していったって、いろんな方に共有していくことで、生きやすくなったりとかもっと楽しくなったりとか、全体が変容していくようなきっかけになっていますよね。そんなふうに、はじまりの美術館もなっていきたいと取り組んでいるところです。

木ノ戸

岡部さんの視点は本当に共感します。「類似」という意味では、福祉もアートもほとんど同義語のように自分としては解釈しています。それはつまり、福祉もアートも、生きづらい窮屈な世の中を変えていくための何がしかの可能性を持っていると思うんですね。あるいは福祉とかアートだけではなくて、「政治」や「経済」とか、そうしたものも同じような意味を本来持っている。だから、その言葉の違いよりも、結局何を目指しているか、何を目的としているかっていうことが大事だと思います。

岡部

そうですね。やっぱり具体的に見るとそれぞれ全然違うところもあります。例えばアートは、もしかしたら物事の➤

その主流の価値観を揺さぶってくれないと、生きづらさも緩まない。そのときにすごくアートに可能性があると思っています。私たちは障害福祉の世界を変えるんじゃないくて、障害福祉の試みから世界を変えていく。そんな生き方ありなんだみたいな、木ノ戸さんのよく言う「ギリギリアウト」なことをやって世界を拡張できれば、障害があるなし関係なくしんどさが緩まるわけです。そのためにも、僕は新しい価値を提示したい。その営みはすごくアートに近いと思っています。



左から鈴木さん、木ノ戸さん、岡部さん

場を開くこと、自己を開くこと

岡部

その「福祉」や「幸せ」において、福祉の現場で行われているのって、実は個のケアと地域作りという両面あるんじゃないかなと思っています。

木ノ戸

やっぱり場を、いかに開くかだと思うんですよ。はじまりの美術館さんの展覧会「ルイジトコトナリー類似と異なり」も、すごく日常との地続き性が目に見えるんですよ。みんなが持っている「顔」というテーマですし、すごくアクセスしやすいですね。そして、「喫茶カブカブ」ですよ。喫茶ってもう誰もが知っている存在ですし、アクセスしやすいですね。敷居を下げるということは、スウィングの主要テーマの一つとしてやっていますが、今のところそういう場所を持ってないんです。なので、スウィングの場を外に持ち出すということで、場所を借りて展覧会したりとか、清掃活動の「ゴミコロリ」なんかもまさにそう。自分たちから開いて行って、アクセ

スしやすい状況を作っています。今、画策しているのは、スウィングを図書館にすることです。それによってスウィングという場の敷居を下げて、もっともっと当たり前にしていきたいって思っています。だから、何がしたいか、なんですよね。自分の幸せを追求して、自分が引くくらい、もっと我がままになったらいいと思うんです。そして、そういう思考性をもって生きてみたら、きっと自分ひとりだけでは幸せになれないってことに気づく。自分の近くの人とか、大切にしたい人も幸せじゃないといけないと思います。

鈴木

まさにそう。自己中って悪い言葉に使われるけれども、存分に自己中でいい。ただ、その自己が閉じると本当ただの傍若無人になってしまう。木ノ戸さんが言うように、当たり前に関係の中で生きているんだから、自己は自己で完結しない。「自己実現」って怪しい言葉だけれど、関係の中で自己を捉えられるのであればアリだと思う。

表現と価値

木ノ戸

さっき鈴木さんから「アーティストは衝動で好きなことをやればいい」ってお話もありましたよね。アーティストも自分たちが持っている可能性の豊かさ、社会に対するインパクトの大きさっていうものをやっぱり知っておいてほしいし、そういう人がアーティストなんじゃないかなって思い始めてます。

岡部

以前、ある著名なアーティストの方に、「良い作品ってどんな作品なんですか？」って臆面もなく聞いたことがあるんです(苦笑)。ちょっと一瞬困った顔しながら、「なんか『こうだ』っていう、一方的な見方があるもんじゃなくて、見た人もいろんなことを感じて、いろんな価値が引き出されるものが良い作品なんじゃないかな」っておっしゃってくれて、「あ、そうか」って気づかされました。そう考えたら、「障害者」と言われる人たちが作ってるものって、すごくいろんなことを想像させたりとか、惹きつけられたり

するなと思って。それってすごいアーティストってことだよなって実感しました。

鈴木

もっと言えば作り出してるモノだけじゃなくて、なにも作らない人も含めて、存在自体がそうですね。「問題行動」といわれるものだって、周りの人は自分がわかるようにしようとするけど、それを面白がれるようになると問題ではなくなる。だから、そうなるためにはどんな手があるかを考えるのが僕らの仕事だと思ってます。

木ノ戸

面白いかどうかって大事ですよ。何かをするときや考えるときに、やっぱり迷うことも多いんですけど、そこには正解がないんですよ。正解がないのに、みんな正解というか、より良い方向に考えようとする。最近スウィングでは、そんなときは「面白いかどうかを価値にしよう」と話したのを思い出しました。

支援やケアから生まれる関係性

岡部

結局、「福祉とアートは類似しているか」って投げ掛けといてあれですけど、本当は人が生きてる中でいろんなことが繰り広げられているし、言葉の問題なだけです。私も支援員として働いていたとき、「どっちが支援されてるんだろう」って思うことがありました。なんかいろんなことを教えてもらうことが多いというか。それをどうにか本人に返さなければって思うし、他の人たちも共有していきたい。そうすることでもっと前に進んでいくんじゃないかと思っています。

木ノ戸

「実は教わるが多かった」みたいな話は、結構聞く言葉ですよ。だけど、私はそれがちょっと危ういかも思っています。「教わるが多い」というのは、実感としてそうだと思うんですが、多い・少ないってわからないじゃないですか。実は、支援する側の方が「そういうことが多かった」って言うけど、それってある意味その人のことを

無視してますよね。その人も、「岡部さんから何かをたくさん得てるんだ」って感じてないとフェアじゃないと思います。だから、たくさん教えられた的発言に関しては、それはそうなんだけれども、やっぱりちょっと上から下への目線を感じてしまうところがあります。

鈴木

それはよく言われる「ケアの双方向性」というものですよ。けれど、「たくさん得てる」と思うんだったら、障害がある人たちが肯定されていないとか、とんでもない扱いを受けているっていう現状を変えることで、お返ししていくしかないですよ。さらに、双方向と言いつつ僕らだけ対価までもらっていて、「なぜ僕にそんな価値があるんだ」って思うけれど、卑下して独善的にごまかすのではなく、力に転じればいい。傾斜関係にあるのをうやむやにせず、それは変えて行ける側にいるということでもあるんだから、よくわからない尺度で価値が有るとか無いとかいうわたしたちの世界の価値観を、変えていく力にしましょうよ。

●登壇者プロフィール



木ノ戸 昌幸 きのと・まさゆき

1977年生まれ・愛媛県出身。立命館大学文学部卒。NPO法人スウィング代表。フリーペーパー『Swinging』編集長。引きこもり支援NPO、演劇、遺跡発掘、福祉施設勤務等の活動・職を経て、2006年、京都・上賀茂にNPO法人スウィングを設立。人の「働き」を「人や社会に働きかけること」と定義し、芸術創作活動「オレたちひょうげん族」、清掃活動「ゴミコロリ」、京都市内公共交通案内「アナタの行き先、教えます。」等の活動をプロデュース。「べき」やら「ねば」やら既存の仕事観・芸術観に疑問符を投げかけながら、社会をオモシロく変えてゆきたいと願ったり願わなかったり。単著に『まともがゆれる 一常識をやめる「スウィング」の実験』（2019／朝日出版社）。



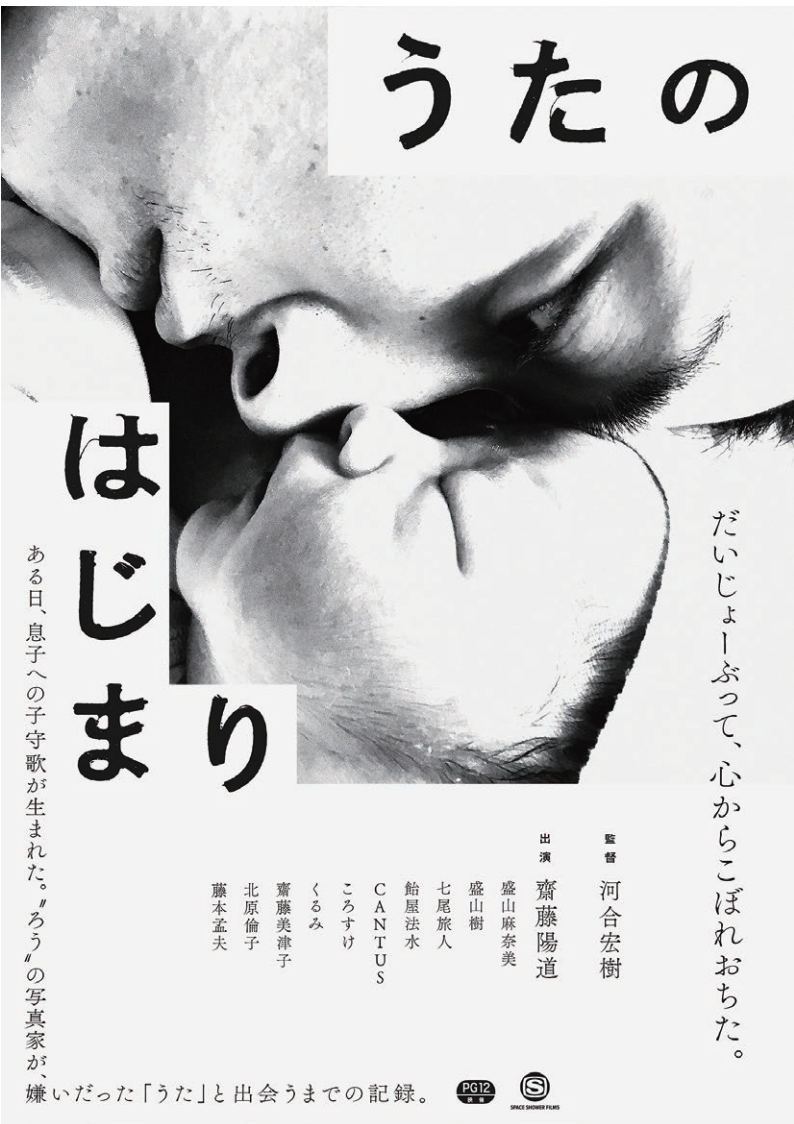
鈴木 励滋 すずき・れいじ

生活介護事業所カブカブ所長・演劇ライター
1973年3月群馬県高崎市生まれ。97年から現職を務め、演劇に関しては『埼玉アーツシアター通信』『げきびあ』『月刊ローチケ』劇団ハイバイのツアーパンフレットなどに書いている。『生きるための試行エイブル・アートの実験』（フィルムアート社、2010年）にも寄稿。師匠の栗原彬さん（政治社会学）との対談が『ソーシャルアート 障害のある人とアートで社会を変える』（学芸出版社、2016年）に掲載された。



岡部 兼芳 おかべ・たかよし

はじまりの美術館 館長
1974年福島県郡山市出身。福祉作業所の支援員・中学校教員を経て、社会福祉法人安積愛育園に入職。知的に障がいをもつ利用者の表現活動をサポートする「ウーニコ」に携わる。2014年からは、福島県猪苗代町に開館した「はじまりの美術館」で館長を務める。



研修を受ける
情報を知る
ネットワークを広げる

上映会&手話トークイベント

映画「うたのはじまり」の上映会と、この映画の出演者でありご夫婦でもある齋藤陽道さんと盛山麻奈美さんをお招きして、手話トークイベントを開催しました。コロナ禍での上映イベントでしたが、感染症対策の徹底とご来場のお客様のご協力をいただき開催しました。

この映画は“ろう”の写真家である齋藤さんが、子どもを授かり、嫌いだっただ「うた」に出会っていくドキュメンタリーです。今回は、音楽を視覚的に表現する試みである「絵字幕」付きの上映を行いました。上映の前に、この映画の監督・河合宏樹さんとの出会いや、「絵字幕」がどのような過程で生まれたのかなどについてお伺いしました。普段聴いている「うた」や歌うこと、そして誰かに想いを伝えることなど、改めていろんなことを考えさせられる映画でした。上映後には、齋藤さんがお子さん・樹さんと向き合う中で始められたことや、盛山さんが写真という表現に行き着いたきっかけなどについて、会場からご質問をいただきました。



ゲスト：齋藤陽道（写真家）、盛山麻奈美（写真家）
会場：こどものひろばプリモ
（福島県耶麻郡猪苗代町大字千代田前田甲 311-1）
日時：2020年10月3日（土）17:30-20:00
（映画本編 86 分／PG12）
参加費：1,500 円
参加者数：20 名
※絵字幕付き上映、手話トークには音声通訳有

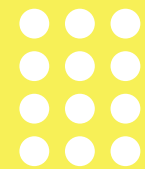
○参加者の感想（一部抜粋）

- ・ゲストのお二人にとって絵字幕が本当に画期的なものだったことがわかりました。映像に気をとられて絵字幕を感じている余裕がなかったので、できることならもう一度はじめてこの映画をみたいです。ありがとうございました。
- ・普段の生活で私は「ことば」に頼りすぎていたなぁと改めて気づかされました。コミュニケーション、伝えること、ことば、うた……いろんなことを考えるきっかけをいただきました。
- ・演劇部で「自分がわからない、伝わらない」と感じている生徒と共に毎日を過ごしています。「伝わる」のしっぽの先を見せてくれた作品を生徒と共に見れないのが残念と思うくらいです。

- ・意図を持った表現よりも、それ以前のあるがままの音、動き、色こそ生命の営みそのものなんだと思いました。それを表現するにはどうしたらいいのか試してみたい。また本作のテーマとは別ですが、出産シーンは自分の息子の時を思い出し、追体験させてもらいました。
- ・齋藤さん、盛山さんのお話がきけて嬉しかったです。きっと人間の体には心地よい振動…波のようなものが、あるのだと思いました。色彩も目にとらえる波なら、音と光景ってちがうようで似ていると思いました。それが重なるところが この映画に出てくる人たちの体験を通して見えたように思いました。共鳴する波を手がかりにもっと人と関わりたいと感じました。

cento -シエント-

福祉と表現にまつわる研修会 2020



障がいのある方の表現活動を支援するご家族や施設職員、また関心のある方などを対象に、「福祉と表現」をテーマとした連続の研修会を開催しました。「cento（シエント）」は、イタリア語で「100」という意味です。日本語の「支援と」という言葉の響きとも重なります。シエントが、たくさんの人と思いが集まって寛容で創造的な社会をつくっていくためのひとつの切り口となることを目指しました。全4回の研修会では、Zoomを通して全国で先進的かつ丁寧に現場で活動を行なう方々にお話いただき、交流を行いました。毎回定員の30名の参加があり、手話による情報保障も行いました。

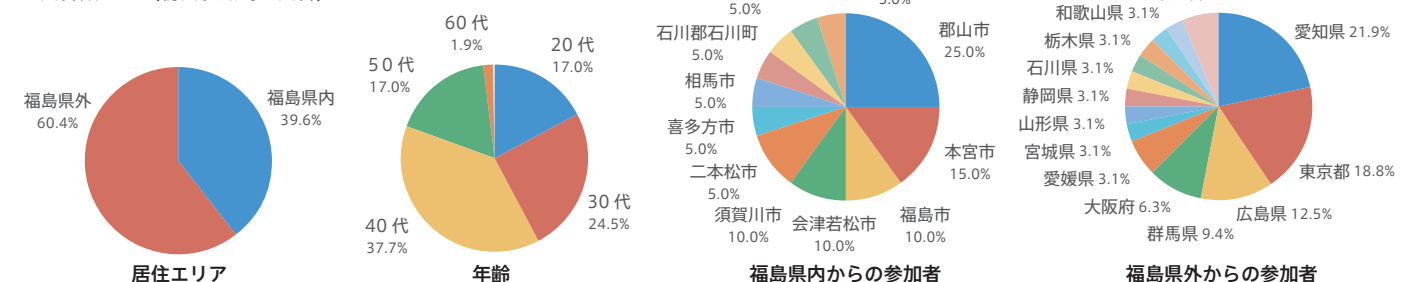
研修を受ける
相談する
ネットワークを広げる

- cento-シエント- 1
全国の活動を知る
日時：2020年12月3日（木）13:00～15:00
講師：長津結一郎（九州大学大学院芸術工学研究院助教）
- cento-シエント- 2
表現活動のヒントや制作方法を知る
日時：2020年12月17日（木）13:00～15:00
講師：早川弘志（やまなみ工房 副施設長）
- cento-シエント- 3
商品化のヒントや広報を知る
日時：2021年1月14日（木）13:00～15:00
講師：森下静香（Good Job！センター香芝 センター長）
- cento-シエント- 4
インターネットでの発信やアーカイブの方法を知る
日時：2021年2月18日（木）13:00～15:00
講師：ササキユイチ・水越雅人（認定NPO法人クリエイティブサポートレッツスタッフ）
大政愛（はじまりの美術館 学芸員）

参加したきっかけなど

- ・企画の視点が素敵だなと思って参加させていただきました。また、交流タイムも設けてくださり、バランスの良い構成でよかったです。
- ・オンライン講義というものに初めて参加、そして、福祉や障がい、アートについて理解を深めたくて、動き出す初めてのきっかけになったのが、このシエントでした。近くではないので、なかなかすぐには行けない距離ですが、このような機会が、はじまりの美術館にまつわるあれこれに興味を持つ、すべての人たちに、広くひらかれていることに、感謝いたします。
- ・自宅で初のズームの操作でしたので不安でしたが、操作を丁寧に説明していただけて助かりました。はじまりの美術館さんからの発信で、今まで知らなかった活動や人々のことを知り、そこから今まで思いつかなかったアイデアの種が生まれています。

回答数＝53（初回参加時に回答）



全国の活動を知る



障害者の表現活動に取り組む施設や団体は、北は北海道から南は沖縄まで日本国内に多数あります。こうした活動はどのように発展し、推進されるようになったのでしょうか。芸術分野で障害者の表現について研究する長津結一郎さんのレクチャーにより「歴史」「法律」「芸術ジャンル」「思想」などさまざまな視点から見渡していきます。

Lecture

歴史、法律、ジャンル、思想から考える

まずは「歴史」から。戦前より精神科医や心理学者が障害のある人の表現に注目する歴史もありましたが、大きな転換点となったのは1950年代に全国的に注目された山下清の存在でした。60年代には全国の障害者福祉施設で絵画教室や絵画療法の取り組みが始まり、90年代には障害者基本法に文化芸術活動の振興が位置付けられます。また2010年にパリで行われた「アール・ブリュット・ジャポネ展」を機に、日本の障害者の芸術は、海外で高い評価を受けていきました。

次に紹介されたのは「法律や国の事業」について。2008年には文部科学省と厚生労働省による「障害者アート推進のための懇談会2008」が開かれ、2017年には「文化芸術基本法」、2018年には「障害者による文化芸術活動の推進における法律」の制定、同年に「障害者による文化芸術活動の推進における基本方針」が作成されるなど、おもに2000年代以降に起こった法の整備や国の事業との関連を解説しました。

そして、美術・音楽・舞台芸術、メディア芸術、アートプロジェクトなどさまざまな「芸術ジャンル」から障害とアートの活動が紹介されました。さらに「芸術にアクセスする方法」として、創造、発表、鑑賞、販売などの方法があげられ、障害のある人の表現活動には「アール・ブリュット」「アウトサイダー・アート」「エイブル・アート」など多くの用語があり、それらは各々の「思想」を反映していることが語られました。



長津 結一郎 ながつ・ゆういちろう

九州大学大学院芸術工学研究院助教。専門はアート・マネジメント、文化政策学。障害のある人などの多様な背景を持つ人々の表現活動に着目した研究を行なっている。2013年東京藝術大学大学院博士後期課程修了、博士（学術・東京藝術大学）。

どのように人と人が出会っていくか

こうして複数の切り口から「障害福祉と芸術」について講じられたのち、障害のある人の表現が「純粹」「魂の芸術」などの言葉で語られることへの危惧、違いを認め合う関係の重要性、マジョリティの意識が変化するきっかけとしてのアート、社会包摂のありかたなど、障害者の芸術表現を考えるうえで重要な視点が追加されました。

そうして、長津さんの研究における「共犯性」という言葉を引き合いに、「障害のある人の芸術活動には、障害の当事者やその支援者、芸術家、芸術分野の支援組織などさまざまな立場の人が関わっていますが、それぞれの目的は異なるでしょう。多様な人が一緒に活動を進めていくプロセスでは、ともに企む『共犯』の関係をつくりあげていくことが大事ではないでしょうか。それは、芸術や福祉といったカテゴリや枠を超え、人と人がどのように出会っていくかということでもあります」と語りました。

そして「同僚の教員が『アートの教育は、自分で決める力を養っていますよね』という言葉に共感した」という出来事から、こうした活動は「関わる人たちが自身が『決める力』を養い、それを発揮していく活動でもあり、それは社会にとって非常に重要なことだと考えています」と続け、「障害のある人とどのように対一の関係を築いていけるか。その人のやっていることに丁寧に耳を澄まし、目を凝らすことで、それを誰に伝えたいと考えるか。それが重要なことだと思います」と結びました。

Session

「障害×アート」

次の一步をなにかから踏み出しますか？

→「思い込みをすてる」

長津：思い込みは見捨てたいですね。僕も大学教員ということもあり、思い込みを捨てねばと日々必死です。

→「目の前にあるかわらないことに、息長く付き合っていきたい。」

長津：大事、大事ですね。私も話をしながら、自分で反省する日々です。

→「共に体験し、共有すること」

長津：共に体験し共有するってすごくいいですね。「共に」っていうのをぜひ活かしていただきたいと思います。

→「作品の質って何だろう。表現の質ってなんだろう。それぞれが思う質を話し合ってみたい。」

長津：まさに今評価の仕事をしていて、そのときに必ず

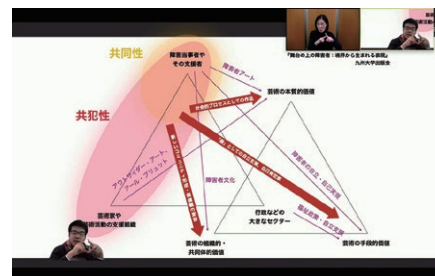
Feedback

Q1. 印象に残った言葉や内容を教えてください

- 「発想を柔軟に受け入れる」という言葉が印象に残りました。思い込みをはずすと、視野が広がってどんどん自由になれる。「障害」に関係なく生活のすべてにおいて当てはまる事だと思います。「こうしないといけない」という先入観のない表現に触れて「そんなのもありか!」という発見をするのが面白いです。
- 「社会包摂の考え方の図を説明されたときの「マジョリティの考え方を変えること、そのきっかけとしてのアート」という言葉が印象に残りました。生涯学習施設の職員として、バリアフリー事業担当者だけでなく、社会包摂の基本的な考え方や心構えは職員全員が学べる機会をつくりたいと思いました。
- 「マイノリティとマジョリティの関係性の変容や共犯的な関係。その関係性によって、アート作品の質が変わる」そのような事をもっと考えていきたいと思いました。

Q2. 「こんなことをしてみたい」など気づきやアイデアを自由にご記入ください

- 「わたしは、障がいのある人が生み出したものを販売し、身の周りに置いていただくことで彼らを「身近に」感じてもらいたいと考えています。最近「売るなんて!もっと美術的価値を高めて保存した方が良いのでは?」という声を頂戴し、悩んでいたところ



ぶち当たることですね。人それぞれ思ってる「質」っていうのは違うんですよね。そこの擦り合わせをしてくことがすごく大事なかなと思います。

→「同じ地平線に立って、それぞれの虹をかける。いろんな角度からその美しさを認め合う。」

長津：それぞれの虹をかけるっていうのはすごくいい言葉ですね。以前、たんぼぼの家の岡部太郎さんが「頂と裾野を国の中で作っていきましょうっていうのはすごくいいことなんだけど、それって別に1個じゃなくていいよね」って言ったんですよ。「頂があって裾野がある。で、向こうにはまた違う頂があって裾野がある。そんなふうに豊かな平野ができてくといいいよね」って言って、その言葉がすごく好きだなと思いました。それぞれに虹をかけるっていうのもきっとそういうイメージに近いのかなと思いました。

だったのですが、様々な立場の人が関わることが、広がりを生むことがわかりました。研修を終え、わたしはわたしのできることを形にしていけばいい、と気持ちを固めることができました。

- 「自分の考えが全てではなく、相手は自分の想像もしないことを考えていることもある、ということに改めて気づかせていただきました。常に広い視野をもち、決めつけず、柔軟にアタマとココロをもって暮らしていきたいです。
- 「小さな表出に気づき、大切にしたい。多様性を地域の中で活かしたいです。

Q3. ご意見・ご感想、講師の方へのメッセージ

- 「自分の中で乱雑になっている色々な要素をわかりやすく整理して落とし込んでいただけたと思いました。
- 「歴史や法律などの要素が最後の「人と人して出会い直す」ですごくまとまっていて、深く理解できました。
- 「ともすれば難しい話を、平易な言葉、やわらかい雰囲気でお話いただき、とてもわかりやすく感じました。コミュニケーションが難しい方への支援は、支援者都合になりがちな面があるように、展示・販売など作品や商品を社会に出していく場面でも、当事者の方がおいてけぼりになりがちな現実があります。真ん中にいるのは誰か、常に頭において活動していきたいです。

表現活動のヒントや 制作方法を知る



滋賀県甲賀市で 88 名の利用者が創作活動を行うやまなみ工房。そこで生まれる作品は、スイスのアール・ブリュット・コレクションや、ニューヨークのアメリカンフォークアート美術館など、世界的なコレクションに収蔵されるなど、国内外で高い評価を受けています。その表現活動のヒントや制作方法を、やまなみ工房副施設長を務める早川弘志さんが語りました。

Lecture

これをすることが幸せである

早川さんは最初に「これをすることが幸せである」というキーワードを出しました。この言葉は、やまなみ工房の表現活動を知るうえで重要なヒントになります。やまなみ工房は 1986 年に内職作業を行う「やまなみ共同作業所」としてスタート。表現活動をするようになったのは、18 歳で入所した三井啓吾さんがきっかけでした。作業を行うなかでストレスをためていた三井さんは、ある休み時間にチラシの裏に何かを描きはじめます。そのときの楽しそうな表情を見た、当時支援員で現在施設長の山下完和さんは「もっといきいきと過ごすための時間や場所にできないだろうか」と考えました。そこから彼らの興味や楽しく過ごせるものを外出や遊びのなかから見つけていきます。こうして粘土や絵画などの創作活動を行うグループ「アトリエころぼっくろ」が生まれ、いまの活動につながりました。

いい作品のためではなく、充実した日常のために

やまなみ工房の数名のアーティストを紹介しながら、表現活動のヒントを探っていきます。人と一緒に過ごすことが苦手な山際正己さんの制作時間は昼休みだけ。誰もいない作業所のなかで通称「正己地蔵」という人形を 20 ～ 30 体つくるのが毎日の日課です。そのほかの時間は、工房の掃除をしたり、誰もいない部屋で寝たり、自分のペースで過ごしています。早川さんによるとやまなみ工房では明確な作業スケジュールなどはなく「その人の思いやペースを尊重する」ことを大事にしています。



早川 弘志 はやかわ・ひろし

やまなみ工房 副施設長。1971 年生まれ。2000 年よりやまなみ工房に支援員として勤務。2008 年から創作グループのアトリエころぼっくろの担当となり、絵画や陶芸を中心とした作品制作活動の支援、各種展覧会の企画や出展、グッズ制作等、マネジメントを行う。

次に、作品倉庫で一人、横たわりながら絵を描く岡元俊雄さん。聴覚や視覚が過敏で集団で過ごすことが苦手な彼は、やまなみ工房に来てからしばらく散歩やドライブに出かける日々が 8 年ほど続きました。あるときトラックが行き交う様子を見つめる岡元さんを見たスタッフが「さっきのトラック、どんなだった？」というと、トラックの絵を描いてくれました。そこから制作をはじめていきます。時間を要したものの「居心地がいい環境と使いやすい画材や素材選び」が岡元さんの表情を変えました。

思いを寄せる男性「まさとさん」をイメージして粘土で作品をつくる鎌江一美さん。自分の思いを伝えることが苦手な彼女は、大好きなまさとさんの前ではなかなか思いを言葉にできませんでした。ですが自分のつくった作品をみて、彼が声をかけてくれたことを機に作品をつくっていくようになります。「本当に好きなことや、その人の思いを認めること」で「思いを表現することにつながっていききました」と早川さんは話します。

やまなみ工房の表現活動の背景には、こうした「その人の大切にしていることにどれだけ答えられるか」「いまの活動に彼らを当てはめるのではなく、彼らが望むことにどのように活動を見出すか」「一人ひとりがどのようなときに幸せを感じるか」といった思想があります。最後に早川さんは「いい作品をつくるための支援ではなく、彼らの安定した日常、充実した日常を探る結果として作品ができる形が一番いいと思っています」と結びました。やまなみ工房のメンバーによる表現は、「これをすることが幸せである」と思えるかどうか、にかかっています。

Session

参加者の質問に 講師の方からお答えいただきました

質問：その人に合った画材をどうやって見極めますか？

早川：とにかくいろいろ試していますね。「この画材を使いたい」という方はそれをそのまま用意したらいいんですけども、なかなかやまなみ工房の利用者の方はそういった思いを言える人は少ないので、やりながら様子を見ています。これ使いやすそうだなとか、これちょっと嫌なのかなとかそういったところで見極めたりしてます。なので、いかに集中してできるかとか、困ってないかとかを見ながら、「ちょっと画材変えてみようか」と提案しています。

質問：作品を外に発信したり、販売することについて作家さんの意思はどう確認されますか？

早川：ご本人で確認できる方は直接聞いて、了解や同意を得たりしてます。ご本人で判断することが難しい方がほとんどなので、ご家族や後見人の方などそういった方の了解のもとやっています。また、作品を展覧会に出展するときや販売に関しては、みなさん取り扱いの規定を設けさせていただいて、契約をしています。本当にその判断がその人にとって正しいかどうかで、なかなか見極めは難しいですね。けど反響や言葉がまたご本人に返ってきて、

Feedback

Q1. 印象に残った言葉や内容を教えてください

→・やまなみの利用者さんそれぞれの個性やその形を尊重する 「これをすることが幸せである」という言葉が特に印象に残りました。
→・トーク中にあった「活動に当てはめるのではなく、何をしたいのかを見つけてあげる。いい作品を作ろうとするのではなく、充実した行動をさせてあげて、そこに価値を見出していく」というスタンスが本当の支援なんだと感じました。
→・「作品を作るためではなく、利用者さんが楽しく過ごす事を尊重した結果がアート作品となっている」という言葉。

Q2. 「こんなことをしてみたい」など気づきやアイデアを自由にご記入ください

→・「なにかをしてもらう」ではなく「好きなことをしてもらう」等、職員の考え方を考えることから始めたいと思いました。
→・私自身、支援員などの経験はなく、個人で絵を描いたりしています。障がいのある方たちの、日常の延長としての作品が、より地域やそこに住む人たちに、自然なかたちで知ってもらう架け橋になるようなことに、これから参加していけたらな、と思います。
→・「利用者さんが自分で好きに表現できる場」があったらうれしい

その人や周りの人の喜びや幸せに繋がったらいいなと思います。

質問：「こんな風に作って見たら？」とリクエストすることはありますか？

早川：あるときもありますね。ご本人の様子とか見ながら、ちょっとこの活動マンネリ化してるかなとか、最近飽きてるのかなっていうときに、ちょっと活動を変えてみたりとか。創作せずにもう遊んでばかりいたりするときにきっかけづくりをしたりしています。

質問：作品をどのように保管していますか？

早川：倉庫にどんどんできたものを詰めていく感じです。絵画は絵画の棚やケースに入れています。ただ、できたものを極力記録していこうとしています。結構手間なんですけど、作品を写真におさめて題名、年代、素材書いてリストを作っています。依頼を受けたときに、すぐアクションが起こせるのはすごく武器になると、その人のアーカイブにもなります。ひと手間かけてきっちり整えることは大事にして、彼らの活動の幅の広がりにつながればいいなと思っています。

かも、と思いました。自分の好きな時に好きなように画材などを使うようなフリースペースを作れないか検討してみようと思います。

Q3. ご意見・ご感想、講師の方へのメッセージ

→・様々な表現をする利用者さんのお話を聞いて、もっとたくさんの表現方法が当事業所でも見つけられるのではないかと思います。たくさんトライしたいと思います。ありがとうございます。とても楽しい勉強会でした。
→・「作業はちゃんと席についてやるもの」「これ（作品）の何がよいのか、おもしろいかわからない」という職員がうちはまだまだ多いです。「利用者さんがやりたいようにやりたいことをやる、これをすることが幸せである」それをわかってもらえるように、これからも伝えていきたいと思います。
→・アートの専門家の方がいらっやってバリバリな施設だと思っていました（笑）。いい意味で裏切られ、アットホームな雰囲気と、決して特別じゃない「やまなみ工房」の当たり前を積み重ねていった結果が今なのかな？ということを感じました。背伸びする必要はないんだなぁと肩の荷が軽くなりましたし、もっともっと彼らのことを知りたいなぁと思いました。

商品化のヒントや 広報を知る



障害のある人たちの表現活動を社会に発信する、奈良県にあるたんぼぼの家。たんぼぼの^{かしぼ}家が2016年に設立した「Good Job! センター香芝」は企業と福祉の垣根をこえて仕事をつくる拠点です。メンバーの個性を活かし、商品の制作や販売を行う Good Job! センター香芝のセンター長、森下静香さんが商品化にまつわる権利や重要な考え方について語りました。

Lecture

商品化にともなう重要な「権利」とは

最初に森下さんから、表現を商品化するときに重要な、知財にまつわる「権利」について紹介されました。さまざまな権利のなかで、著作物と認められる表現を保護する「著作権」や商品名などに関わる「商標権」は、特に障がいのある人の表現活動とも関係が深い知的財産権の一種です。たんぼぼの家も関わる「エイブルアート・カンパニー」では、119 人のアーティストによる 13500 点ほどの作品をウェブで公開し、アーティストと企業をつないでいますが、あるとき特定の企業が商標権をもつ有名な商品名が描かれた絵を服飾雑貨のデザインに採用したいという依頼がありました。そこで使用は難しいと判断するのではなく、作家本人と相談して商標権に触れる作品の一部分を修正し、使ってもらったといいます。森下さんは「法律の専門家が一律に解決できるわけではなく、その事例ごとに考えていくことが重要。自由な表現を制限せず、正しい知識をもち、柔軟に対応していくことが大事です」と話します。

Good Job! センター香芝の商品づくり

次に Good Job! センター香芝での商品化の活動について話されました。障がいのある人の所得をあげることを目的に企業やクリエイターと協働しながら施設運営を行う Good Job! センター香芝。就労支援や生活介護の事業所として、約 50 人の利用者とともに、ものをつくることから発信するところまで一体的に取り組んでいます。これまで行われた数ある商品開発のなかでも人気商品の張り子



森下 静香 もりした・しずか

Good Job ! センター香芝センター長。たんぼぼの家にて、障害のある人の芸術文化活動の支援や調査研究、アートプロジェクトの企画運営、医療や福祉などのケアの現場におけるアートの活動の調査を行う。2012 年より、アート、デザイン、ビジネス、福祉の分野をこえて新しい仕事を提案する Good Job ! プロジェクトに取り組む。

の「グッドドッグ」を例に開発のプロセスが紹介されました。まず、Good Job! センター香芝のカフェで提供するホットドッグをモチーフに商品をつくる案があがり、たんぼぼの家のアーティスト・中村真由美さんがつくるクマの立体作品から、ホットドッグと犬を組み合わせたマスコットの製造が決まります。作品の二次利用について中村さんに許諾を得たのち、作品を 3D スキャンし、3DCG データにしたものをもとに着色パターンなど製品デザインを検討。できた型に紙をはり、色を塗って張り子を製造します。オリジナル商品のほか全国各地の商品を 1000 点以上扱うオンラインストアでは、商品の紹介、SNS での広報などもメンバーが行っています。

最後に森下さんは知財と権利について重要なことについて述べました。1 つめは、契約、対価、成果の共有、公表の方法などすべての段階において「表現に敬意を払う」こと。次に、知財は大切なものを守りながら発信していくための権利であり「発信するために守る」こと。最後に、契約は表現をどう扱うかを可視化したものであり「主体的に学び、専門家と連携も行う」こと。こうした考えのもと、近年たんぼぼの家では、障がいのある人の表現と伝統工芸を結ぶプロジェクト、福祉と技術の全国ネットワーク「IoT と FAB と福祉」など新たな試みにも取り組んでいます。※詳細を知りたい方はウェブサイト goodjobproject.com へ

Session

参加者の質問に 講師の方からお答えいただきました

質問：一番最初に商品化したものはなんですか？

森下：たんぼぼの家の活動がはじまった 70 年代当初に奈良の薬師寺を描いた絵ハガキをつくっていました。また東大寺などで節分のときに販売させてもらう土鈴の「厄除鬼」は今でもつくっています。

質問：表現したものを商品デザイン化するとき、誰がそれを担当していますか？

森下：いろいろなケースがあり、内部だけで作ることもありますが、外部の方に依頼することもあります。例えば山形の綴通（絨毯）では山形在住の障がいのある人の表現を活かし、山形在住のデザイナーの方に入ってください、米沢の綴通の会社がつくりました。私たちはコーディネートをしたというケースになります。

質問：適量生産に向く商品はありますか？

森下：企業などから発注があったときに、ある程度対応できるような商品は持っていた方がよいと思います。例えばクリアファイルのような文房具なども、外注できるのでいいと思います。一方、1 点ものの商品も大切にすると良いと思います。➤

Feedback

Q1. 印象に残った言葉や内容を教えてください

→ ・「発信するために守る」は、何のために著作権を守るのか、基本に立ち返る言葉だと思いました。
→ ・「専門家だけにまかせきりにせずに、連携しながら自分たちで考えていくこと」福祉に限らないことだと思いますが、特に、忙しい福祉の現場では「専門家に任せておけば OK」という雰囲気があると思います。" 連携 " をとりながら主体的に動くことがわたし自身も重要だと考えています。
→ ・「適量生産」こちらも、福祉に限らず、ですが良い考え方だなと思いました。求められる分だけ作れるようになれば、みんながうれいそうですね。

Q2. 「こんなことをしてみたい」など気づきやアイデアを自由にご記入ください

→ ・「地域性」という言葉にはっとしました。この町ならではのものを作れないか、利用者さんに提案してみようと思います。
→ ・今回の研修を通じて、完成したモノだけでなく、それが開発・製造された施設や制作者も紹介するような展示販売、それと連動した美術館活動などを一緒に展開できたらよいなぁと妄想が膨らみました。
→ ・利用者さんの創作活動を製品にして色々な方に知ってほしい。➤

質問：ご家族やご本人の気持ちを尊重するよう働きかけるなかでの工夫や、難しかったエピソードなどあれば教えてください。

森下：日々確認は大事だと思い、失敗は組織内で共有して繰り返さないようにしています。例えば、アーティストネームがそのときによって変わる方がいらっしゃるのですが、名前が変わったのに以前のお名前のままにしてしまったことがありました。

質問：メンバーのみなさんは、広報の仕事にどのように取り組まれていますか？

森下：広報も大切な仕事なので Instagram や Facebook などに、障がいのあるメンバーも積極的に参加していただいています。人によってはファンがついて欲しいなと思っており、メールニュースで「mariko の部屋」というコーナーをもつメンバーもいます。また、Youtube の動画撮影や編集、ウェブサイトの商品撮影や紹介の文章も覚えてもらいやってもらったりと、一つ一つ仕事を作っています。

その為に作家さんの良い所をどんどん見つけて製品化につなげていきたいです。

Q3. ご意見・ご感想、講師の方へのメッセージ

→ ・うちは、入所と生活介護の施設です。たまに、生活介護の一部の作業班で少しの収入がありますが、その取り扱いには何も決まりがなく、作業班に還元されることがありませんでした。今後、「表現に敬意を払う」その気持ちを大切にしながら、自分にできることを考え、無理のない範囲で提案していきたいと思います。
→ ・仕事や商品のことばかり考えがちでしたが、人や作品を守るためにも、権利のことも学ばなければと気付かせて頂いて良かったです。
→ ・最近権利について学ぶ機会が多くなりましたが、施設さんによって内容は様々ですが、きちんと確認合って契約を結ぶことが大切だということが分かりました。GJ ! センターの SNS はいつも楽しみに拝見しています。ありがとうございました！
→ ・福祉の現場にいらっしゃる森下さんからお伝えいただくことで、慣れない分野ではありますが、イメージしながら拝聴することができました。写真をたくさんご用意いただけたのも、とても良かったです。

インターネットでの発信やアーカイブの方法を知る

静岡県浜松市にある 2 つの施設「たけし文化センター 連尺町」「のヴぁ公民館」を拠点に、独自の活動をプロジェクトやインターネットメディアを通して発信を続ける認定 NPO 法人クリエイティブサポートレッツ（以下、レッツ）。近年、創作活動から生まれた作品や表現のデジタルアーカイブ化を試みたはじまりの美術館。両者のインターネットにおける発信やアーカイブの取り組みが紹介されました。

Lecture

クリエイティブサポートレッツの「発信」

レッツは障害福祉事業と文化事業を両輪として活動を行っています。「両者は、ともに人間が豊かに生き、それぞれの尊厳をつくるという共通点がある」とスタッフの水越雅人さん。同法人における「発信」について『現場』でおこっていることやそこで生まれた『表現』を『発信』するといった直線的な広報ではなく、『現場』『表現』『発信』の 3 つの要素が重なっている」と話しました。「ゆっくりと歩く太田さんというメンバーがいます。彼のペースでみんなと散歩をしたとき、ほかのメンバーに余白が生まれて遊びが始まりました。そのスピードや太田さんの歩く姿を含めて、それが表現だと考えています」。こうした考えのもと、2016 年から「その人の存在をまるごと認め」、「自分を表す方法や大切にしていることを文化創造の軸」とする「表現未満、」という考え方をもとに、観光事業や文化祭などさまざまなプロジェクトを行っています。同スタッフのササキユーイチさんからは、2015 年に始めた「のヴぁてれび」について紹介。もともとレッツでは、スタッフが現場の「グッときた」様子を撮影し、スタッフ、利用者家族や一般の方と共有する「動画会」がありました。この動画会を発展させた「のヴぁてれび」は、撮影や出演から編集、音楽など多様な関わり方のある映像制作を通して「就労」を生み出すこと、そして自分たちで伝えたいことを発信する「インクルーシブメディア」という 2 つの目的をもちます。動画に映るレッツの日常は「表現」そのもの。ササキさんは「動画の蓄積によりレッツが面としてみえます。映像制作という『遊び』ができたことで、現場に新しい関係が生まれたり振り返る機会としても機能しています」と話しました。



ササキ ユーイチ

認定 NPO 法人クリエイティブサポートレッツ スタッフ。2015 年からレッツに勤める。インクルーシブメディア「のヴぁてれび」の運営を 2020 年まで担当。



水越 雅人 みずこし・まさと

認定 NPO 法人クリエイティブサポートレッツ スタッフ。2010 年、レッツに入職。自立訓練や生活介護の現場を経験し、現在は就労継続支援 B 型を担当。



大政 愛 おおまさ・あい

社会福祉法人安積愛育園 はじまりの美術館 学芸員。2016 年より現職。はじまりの美術館では主に展覧会の企画運営、アーカイブ事業などを担当。

はじまりの美術館の「アーカイブ」

「自分たちの言葉や表現で、さまざまな人に届けたい」という思いから、Twitter、Facebook、Instagram、note など利用者層の異なる複数の SNS を使うはじまりの美術館。大事にしているのは「誰にみられても困らない投稿」「バズる必要はない」「他団体や地域とつながりをつくり活動を残していくこと」です。一方デジタルアーカイブプロジェクトにも取り組んでいます。1997 年より社会福祉法人安積愛育園が行う「unico（ウーニコ）」と呼ぶ創作活動で生み出された多量の作品について「どのように保管すればよいか」「何を残せばよいか」などの悩みを抱えてきました。そこで 2017 年に同プロジェクトをスタートし、法人の 50 周年記念にあわせて支援にあたる職員が選んだ 50 作品をポストカードに。選ぶ基準は 4 つ。代表作と思うものを「メジャー」、これはすごい！と思うものを「インパクト」、最近気になる作品を「ルーキー」、作品が生まれる過程に注目した「エピソード」です。選んだ作品は、記録・撮影し、新たなアーカイブサイトで公開。一連のプロジェクトを担当した大政愛は「『選ぶ』『残す』という判断基準は、支援する現場の担当者と話して決めましたが、この過程が最も重要でした。デジタルアーカイブは法人の活動が積み重ねられた財産。こうした日々の選択を積み重ね、文化はつくられているのかもしれない」と語りました。

Session

参加者の質問に講師の方からお答えいただきました

質問：発信を続けてきたことで変わってきたことはありますか？ また、これからの課題はありますか？

ササキ：「のヴぁてれび」に関して言えば、週に 1 回更新しているのですが、やりながら体力がついていくというか、それがあることが日常になっていったという変化がありました。課題は、レッツでは様々な文化事業をやっているのですが、どうしても「発信する」よりも、企てたり準備したりする「作る」ことに注力してしまうことです。発信や広報は、どうしても後手に回ってしまうところがあって、それを専門に考えるスタッフがいてもいいのかなと感じてます。

水越：現場で支援しながら、文化事業寄りで発信していくときに、なかなか両立が難しいところがあります。強度のある発信をどう作っていくかは課題です。発信を続けるなかで変わったことですが、「ほぼ 7 割くらいは実験」だと思っています。放送局というか YouTube チャンネルを自前で持っているということで、作り方がいろいろと増えるという相乗効果があるのかなと思っています。➤

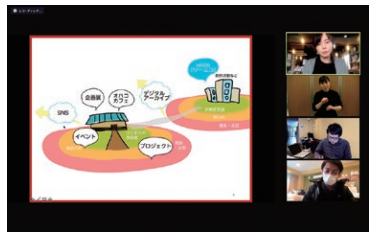
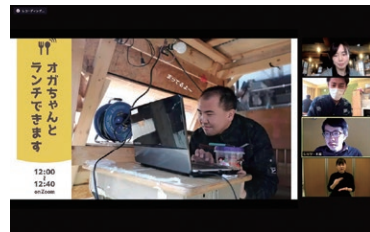
Feedback

Q1. 印象に残った言葉や内容を教えてください

- ・普通なかなか入れない現場の日常を共有できる、面白い体験でした。発信と受信という一方通行になってしまいがちなところを、ランチ zoom という形で双方向に繋がる時間ができるのも、いい試みだと思いました。
- ・「好きなことだけする」のではなく「好きなことから始める」
- ・消えていくこと（腐る）を受け止める
- ・散歩も発信
- ・「色んな人が生きてるんだぜ」って発信するところも支援
- ・レッツのホームページで利用者の紹介を「タレント」とされていたり、同じようにスタッフの方の紹介を載せられていることが印象に残りました。作品の評価ではなく、その人そのままの「ありのまま」を社会に伝えるという視点が、改めて考えさせられました。

Q2. 「こんなことをしてみたい」など気づきやアイデアを自由にご記入ください

- ・雰囲気やエピソードなどの背景が伝わる写真や動画をとりたいと日々励んでいましたが、声や音という視点はなかったなぁと気づきました。日々の生活そのものが、その人にとっての作品と思う➤



大政：発信を続けることで、まず知ってもらう機会が増えました。また、アーカイブができたことで、作品のデザイン使用や展覧会の出品に応えることがスムーズにできるようになりました。課題は、アーカイブを習慣にしていくことだと思います。

質問：レッツさんの一日のメンバーさんのスケジュールはどのような流れですか？

水越：メンバー共通のメニューは、12 時に昼食、15 時におやつ、その後、みんなで 1 日をふりかえる「反省会」をして、掃除した後、16 時に帰宅という流れです。それだけが決まっていて、あとは個別に自由です。それぞれ、こだわっていることや好きなことなどをしています。散歩に行ったり、突然セッションが始まったり、絵を描いたり、メイクしたり、通りの車の音を聞いたり、寝ていたり。過ごし方も来所の時間もバラバラなので、共通メニューでみんなが顔を合わせて過ごす時間を作っています。

と残す形のアイディアが浮かんできました。

- ・発信の在り方について、立ち止まって考えてみたいです。わたしはオンラインショップの運営も行っているのですが、商品を売るときに、作り手のみなさんの写真も載せるようにしています。例えば、作っているところだけでなく、その人の別の面がわかる写真を載せるなどしたいな～と思いました。
- ・動画を撮ることで、形として伝えられない事も残すことが出来るとおもうと、音や動きなども残していきたいなと思います。

Q3. ご意見・ご感想、講師の方へのメッセージ

- ・レッツさんの「実験」というスタンスがいい意味で肩の力が抜けていていいなと思いました。
- ・「作品」と呼ばれるものは様々な関係性から生まれてくるものが多い、ということにも改めて納得でした。作品を通して関係性を伝えていくことが、その人を知る一つの手がかりになるのかも、と感じました。たくさんの学びと気づきをありがとうございました。
- ・素敵な研修会を企画して頂きありがとうございました。この研修を通して表現について様々な視点から考える事ができ、事業所なども知るきっかけとなりました。とても面白かったです！

シエント2020 まとめ



シエント2020 総括

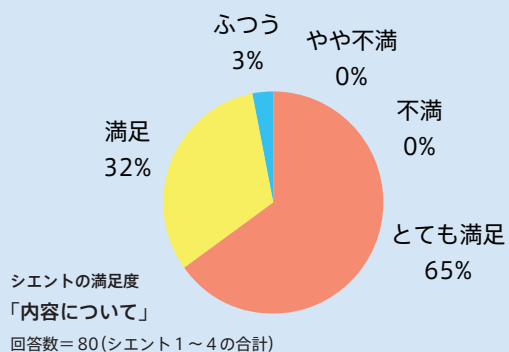
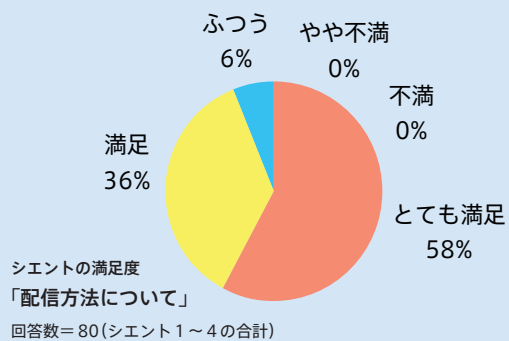
「cento- シエント - 福祉と表現にまつわる研修会 2020」（以下シエント）は、2015 年 11 月にはじまりの美術館で開催した「cento 福祉と表現にまつわるエトセトラを話す会」が原点のひとつになっています。このときは、福島県外の福祉と表現に関わる取り組みの事例紹介やクロストークを行い、福祉現場で働く職員や福祉施設での創作活動に興味のある方たちの意見交換の場として実施しました。その後、はじまりの美術館としても現場の方にターゲットを絞ったイベント等を行うことができておりませんでした。2020 年度の支援センター事業の研修会として再びシエントを企画しました。

当初、参加者が 1 会場に集まって実践的な研修会やワークショップ、意見交換を行うことをイメージしていました。しかし、新型コロナウイルス感染症の拡大が収まらず、オンライン研修会として実施することになりました。はじまりの

美術館としても初めての取り組みでしたが、講師と参加者、あるいは参加者同士の双方向のやりとりを試行錯誤しながら、全 4 回の研修会を実施しました。福島県内に限らず全国各地からの参加があり、さらに、支援員やご家族の方に限らず、障がいのある当事者の方やこれから福祉と表現に関わりたい方など、幅広い方のご参加がありました。また、直接顔を合わせて実施できない不安もありましたが、研修会後の「振り返りシート」には、毎回参加者の熱い想いが記されており、運営側も多くエネルギーをいただきました。「シエント」のネーミングに込めた「支援と」の後ろに続くものは、参加者一人一人によって全く異なると想像します。この研修会をきっかけに、参加者の現場や日常が少しずつでも豊かに変化するきっかけになることを願います。（はじまりの美術館 学芸員 大政愛）

全 4 回を通しての参加者の感想(抜粋)

- ・参加するごとに進行具合もわかってきて、リラックスして聞くことができました。仕事をしているとなかなか 4 回連続で受講するのも難しいのですが、オンライン配信ということもあり、会社での理解も得られました。資料を後で送っていただけるのも大変勉強になりました。今後も、継続して欲しいです。
- ・参加枠を（福島県内だけでなく）全国に広げていただけたこと、大変ありがたく思っております。連続で参加したことで、自分の中にアンテナをたくさん立てることができた気がします。（中略）たくさんの学びと気づきをいただいたことに心からの感謝を込めて。今後の活動にいかすとともに、周りの人に還元していきたいと思います。ありがとうございました。
- ・様々な角度から福祉と表現について学べました。ありがとうございます。
- ・こういう形での研修は初めてでしたが、コロナになって数少ない良かった副産物という気がします。遠い他県のはじまりの美術館さんや、事業所さんなどのお話が聞けて貴重な機会だったと思います。ありがとうございました。

福島市で
きになる⇄まちなか美術館

会期：2021 年 3 月 3 日（水）～3 月 28 日（日）

会場：福島県福島市内の店舗など

社会福祉法人安積愛育園はじまりの美術館では、福島県から 2017 年より委託を受け、福島県障がい者芸術作品展「きになるちひょうげん」の企画運営を行っています。今年度行なった第 4 回目の開催では、応募総数 259 組、387 点の作品が集まり、作品展 44 日間の会期中には 1082 名の方にご来場いただきました。新型コロナウイルス感染症拡大の影響もあなかでしたが、

来場いただいた方は展示された作品や表現をじっくりと楽しみ、それぞれに「きになる」作品を選んでいる姿が印象的でした。

そして今回、お店などを営む人たちに「きになるちひょうげん 2020」からご自身のきになる作品を選んでいただき、店舗などに展示いただく「きになるちまちなか美術館」を実施しました。

初開催となる今回は「福島市」の店舗等の方々を対象とさせて頂きました。きになるちひょうげんを軸に、まちを巡り、人と作品、そして人と人が出会うきっかけとなることを願い、企画しました。次年度以降も、様々な地域で実施していければと考えています。





SAKAMOTO COFFEE

高野想大《大好きおもう》

きになるポイント

白鵬が右下にいて、あまり主張していないところ。行司がおすもうの中心なのかと考えさせられる作品です。



食堂ヒトト

中島貴子《お母さんで行きたい場所》

きになるポイント

色がたくさん使われていて、気持ちがわくわくしてきて、どんな思いで描いたのかになりました。どこに行きたかったのかなぁ。



Vase ~ Stay&Lounge ~

土屋康一《花のケーキ》

きになるポイント

カラフルな《花のケーキ》”どんな味がするのかな。”



Books & Cafe コトウ

佐藤琴羽《バナナ》

きになるポイント

躍動感と色の鮮やかさに惹かれました。



参加店舗が選んだ「きになる作品」



暮しの良品 いげた

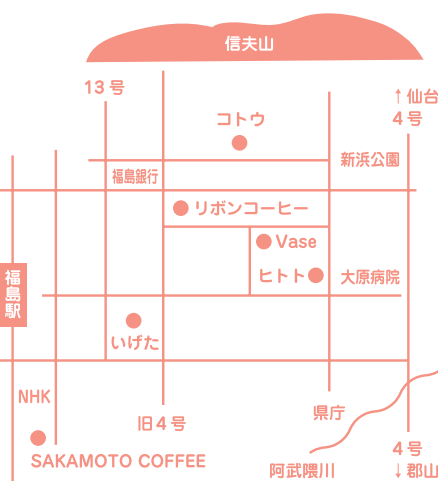
① S・E《僕のコンビニ》、②遠藤百恵《「M」のイメージ》
③本田正《なっとう》④《ながれるパープルながれるグリーン》

きになるポイント

《僕のコンビニ》こんなコンビニの表し方があったとは！作者の好きな物が気になる。
《「M」のイメージ》色使いが印象的。ストーリーが気になる。この絵のお話し、してくれないかな…。
《なっとう》《ながれるパープルながれるグリーン》このタイトルからどうしてこのかたちが想像できよう…。2つの作品を並べた時の明るいい世界観がとても好き。



福島市街地 エリア



SEKIYA COFFEE&GOOD TIMES

鈴木盛衛《乳母車（買物カート）》、松本秀勝《月人》

きになるポイント

乳母車（買物カート）は、一度見たら忘れられない。もう言うことがありません。月人は、なんだか本当に存在しそう。黄色の台もいい感じ。

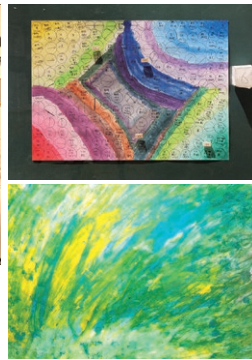


RIBBON∞COFFEE

大内陽平《4つのスタート》、安斎隆史《アマビエ》

きになるポイント

《アマビエ》どのあたりがアマビエなんだろう…。アマビエの何をあらわしているんだろう…気になる。《4つのスタート》どこにたどりつけばゴールなんだろう…。「海」とか「川」とかに止まったら、どうしたらいいかな。特徴的なマスが多い。気になる。

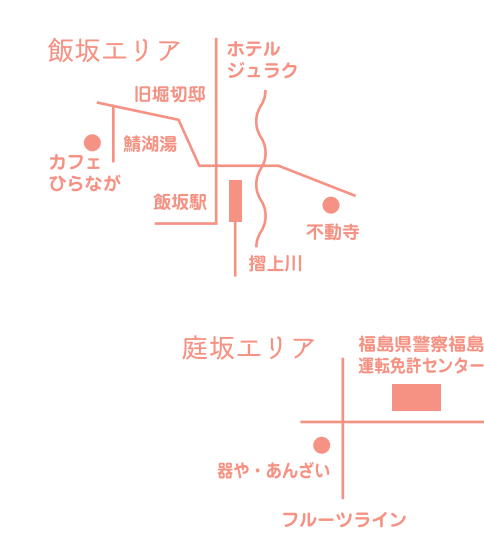


不動寺

齋藤冬音《うちゅう》、 本田翔太《無題》
鈴木優豪《ぼくのすきな町》、岩崎莉央《無題》
滝田大悟《無題》、 松藤漣《おひるのかね》

きになるポイント

水彩絵の具特有の、優しい色使いと筆運びが目飛び込んできた。作品名は『うちゅう』ということだが、実在する宇宙を描いたものか、作家のこころのなかをうちゅうと表現したのか、とてもきになった。



Cafe HIRANAGA

ぼん太《流れ星》

きになるポイント

猫が大好きで、家で飼ってる猫もこの作品のような表現をすることがあるので、とても共感いたしました。



utsuwa.gallery あんざい

青山颯《ラフランス》

きになるポイント

洋梨の描き方が個性的で面白く、全体の色使いがシックでステキです。



※きになるポイントはお店の方からのコメントです。※ SEKIYA COFFEE&GOOD TIMESの方が選んだ作品は、暮しの良品 いげたに展示されました。

参加店舗

SAKAMOTO COFFEE、Books&Cafe コトウ

RIBBON∞COFFEE、暮しの良品 いげた

Vase ~ Stay&Lounge~, 食堂ヒトト

不動寺、cafe HIRANAGA、utsuwa.gallery あんざい

SEKIYA COFFEE&GOOD TIMES(選定のみ)

出展作家

青山颯、安斎隆史、岩崎莉央、S・E、

遠藤百恵、大内陽平、齋藤冬音、佐藤琴羽、

鈴木盛衛、鈴木優豪、高野想大、滝田大悟、

土屋康一、中島貴子、ぼん太、本田正、

本田翔太、松藤漣、松本秀勝

みんなが
知らない
土屋康一

わたしが
知ってる
土屋さん

 作品や表現と呼ばれるものは、様々な関係やりとり
りのなかで生まれてきたものであると考えます。そしてこの作品や表現は、誰かと誰かが会おう、その一つの入り口にもなるものだと思います。

今回はこのことを踏まえ「知る」をテーマとし、郡山市在住の土屋康一さんを紹介する展覧会を開催しました。館内では土屋さんの作品だけでなく、ふだん過ごしている自宅や施設でのインタビュー映像、スケッチブック、身近な方の声や言葉などを通して、多面的に「土屋さん」を「知る」体験を提案しました。

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、作者本人と鑑賞者が直接会うことは叶いませんでしたが、代わりに土屋さんとオンラインや手紙で交流の機会を設けました。



会 期：2021年1月30日(土)～3月28日(日) ※火曜休館
会 場：はじまりの美術館(福島県耶麻郡猪苗代町新町4873)
観覧料：一般500円、65歳以上250円、高校生以下・障がい者手帳を
お持ちの方および付添いの方(1名まで)無料
出展作家：土屋康一



右上↗ 《花》2007年
右下↘ 《りんご》2018年

↓上《無題（葉っぱ）》制作年不詳
下《祈願》2012年

土屋 康一

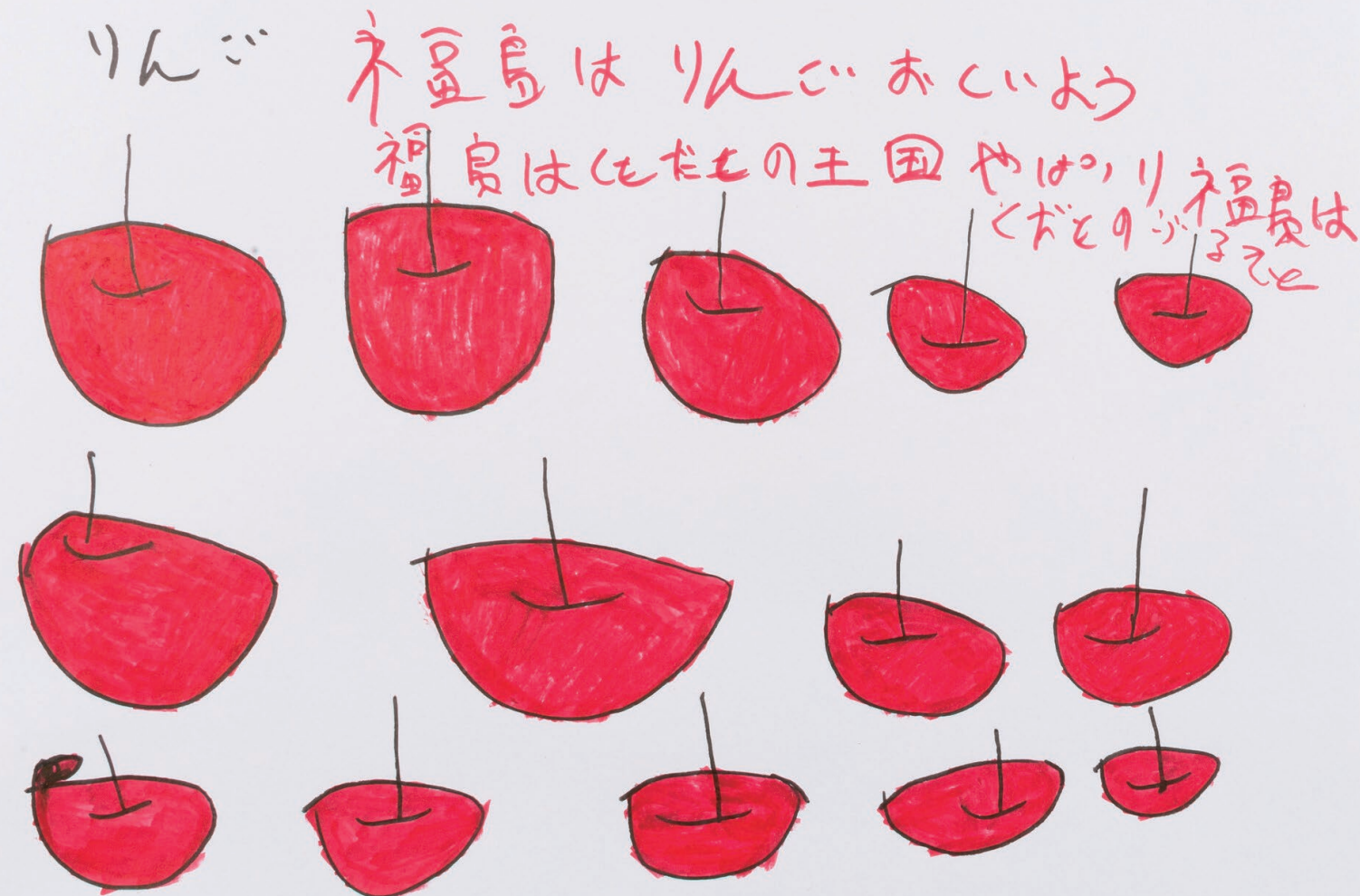
TSUCHIYA Koichi

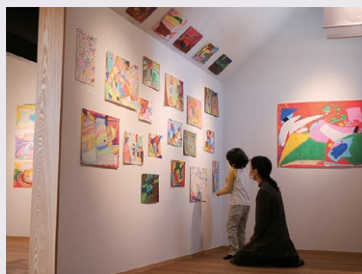
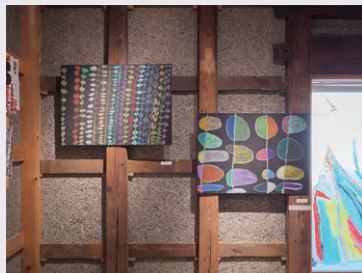
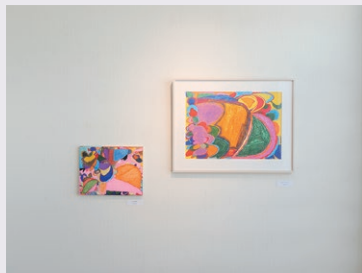
1975 年 栃木県生まれ。幼少期に福島県郡山市に転居し、現在も郡山市在住。

2004 年より、郡山市にある「地域生活サポートセンターパッソ」に通所し、絵を描くことをはじめ、様々な活動を行なっている。社会福祉法人安積愛育園の創作活動支援プロジェクト「ウーニコ」の作家の一人でもある。

土屋の代表的な作品は、「葉っぱ」と題される作品群と、「はな」と題される画面全体を複数色で塗り分ける作品群である。「葉っぱ」「はな」双方とも鮮やかな色彩が共通しており、植物の生命力を想起させる。その他にもお寿司やスイーツなどの食べ物、人物、バスノ

など、様々なものを描く。これまでの主な出展歴に「感！生！生きることの共振 岩手・福島からのメッセージ」（2011/ 工房集ギャラリー・埼玉）、「東北をつなぐ みちのくの恵み」（2012/ もうひとつの美術館 / 栃木）、「ほくほく東北 アートでつなぐ、対話が芽吹く」（2015/ はじまりの美術館 / 福島）、他多数。また 2019 年に開催された「安倍総理と障害者との集い」にて首相官邸に作品が展示された。2019 年頃よりアートライフブランド「HERALBONY」のプロダクトの原画に採用される機会が増えるなど、コラボレーションが広がっている。なお、本展が初個展となる。





来場者からの感想

- ・企画されているスタッフさんたちの「この人を紹介したい!」という思いがとてもよく伝わってきました。誰かのコメントに「表現を通じて笑顔でコミュニケーションできる」という話があったのが、印象的でした。家に帰ったら、私も何か描きたい!と元気が出ました。
- ・土屋さんの存在をアートという入り口から知り得て、その先の多面な土屋さん。一人の人間はすでに多様であって、一人の人間をほりすめていくと自然に多様な価値観に行きつくような。そんな光の当て方で、キラキラかがやく万華鏡のような展示会でした。
- ・展示品はほっこりして暖かい気持ちになりました。これから土屋さんの活動を応援しております!
- ・生の作品+インタビュー+職員さんの声などで、立体的に土屋さんを知れて良かったです。
- ・子ども達も楽しめました。土屋さんの絵は、いろんな方々に愛されていますね。
- ・土屋さんの普段の姿を映した動画がおもしろかったです。あと、一番奥のガラスに直接描いた絵は、雪とコラボしてて最高にステキ!

でした。雪国万歳!!と、久々に思いました(笑)

・とてもよい空間でした。また来たいと思います。

・また伺います。作者の土屋さんの映像も絵も時とても良かったと思います。

・自身も障がい者なのですが、土屋さんの作品ひとつひとつから、個性や無限の可能性を感じました。鮮やかな色使いの作品の中、その空間にひと足早い春の訪れを見る感じがしました。

・色づかいがとてもきれいで良かったです。

・とても心が落ち着く場所でした。土屋さんの絵も見えて楽しくワクワクしました。また必ず来ようと思います。

・社会福祉士です。来年度から縁あって障がいのある方の支援に携わることになりました。いつも素晴らしい作品に触れることができとても好きな美術館です。土屋さんの作品との出会いを大切に4月から頑張ろうと思います。ありがとうございました。

メディア掲載

今回の事業に関して紹介・掲載いただいたメディア等を紹介します。

トークイベント「福祉とアートは類似しているか!？」

9/19 福島民報 20 面 福祉とアート考えて / あすライブ動画を配信

映画「うたのはじまり」上映会＆手話トークイベント

10/7 福島民報 11 面 「うたのはじまり」上映 / 聴覚障害テーマの映画

10/25 福島民友 10 面 「うたのはじまり」上映

cento- シエント - 福祉と表現にまつわる研修会 2020

11/26 ふくしまニュースリリース ふくしまニュース WEB ページに掲載

11/26 アートサポートセンターひゅるる アートセミナーページに掲載

11/26 あいちアールブリュット ネットワークセンター 外部イベントの紹介に掲載

12/1 徳島県障がい者芸術・文化活動支援センター 研修会・展示会・イベント情報に掲載

12/9 北海道アールブリュットネットワーク協議会ジェントリー ブログに掲載

福島県障がい者芸術作品展「きになるゝひょうげん 2020」

10/19 福島民報 10 面 障害者作品募る / 来月 8 日まで絵画や書道など

11/18 福島民報 9 面 日比野さんら審査 / 21 日から 県障がい者芸術展

11/22 福島民友 4 面 竹本さん知事賞 / 県障がい者芸術作品展開幕

11/22 福島民報 3 面 知事賞に竹本さん / 県障がい者芸術作品展

11/27 ふくしまニュースリリース ふくしまニュース WEB ページに掲載

福島市で きになるゝまちなか美術館

3/10 徳島県障がい者芸術・文化活動支援センター 研修会・展示会・イベント情報に掲載

3/14 ふくしまニュースリリース ふくしまニュース WEB ページに掲載

unico file vol.3 みんなが知らない土屋康一／わたしが知ってる土屋さん

1/29、2/5 福島民友 9 面 (11 面) おでかけスポット情報 / unico file vol.3 土屋康一展開催

1/30 福島民友 14 面 作家・土屋さん初の個展 / はじまりの美術館 / 窓にも作品描く

1/30 福島民報ワイド面 色鮮やかな絵画展示 / きょうから郡山の土屋さん

2/2 福島民友 10 面 土屋さんの作品並ぶ / 初個展、素顔も紹介

2/8 ふくしまニュースリリース ふくしまニュース WEB ページに掲載

3/8 日本財団 DIVERSITY IN THE ARTS 展覧会紹介ページに掲載

3/16 ふくしま FM「RADIO GROOVE」内で紹介

3/20 福島中央テレビ 特別番組「とりどりのアート」内で紹介

福島県障がい者芸術文化活動支援センター はじまりの美術館 2020 年度事業報告書

編集：はじまりの美術館（岡部兼芳、小林竜也、大政愛）

編集協力：佐藤恵美

編集補助：はじまりの美術館（青木早知子、中野美奈子）

写真：はじまりの美術館、白玉亮次（p.24-27）

イラスト：ふるやまなつみ

デザイン：FRIDAY SCREEN

発行：社会福祉法人安積愛育園 はじまりの美術館

〒969-3122 福島県耶麻郡猪苗代町新町 4873

TEL/FAX：0242-62-3454

2021 年 3 月 31 日発行

© 2021 HAJIMARI ART CENTER All Rights Reserved. 無断転載複写禁止

福島県障がい者芸術文化活動支援センター

はじまりの美術館

2020年度事業報告書

ご相談はこちらまで

はじまりの美術館 相談窓口 ※相談は無料です。

Tel. 0242-62-3454 10:00-18:00 (火曜休館・展示入れ替え期間中休館)

Mail. soudan@hajimari-ac.com

※直接はじまりの美術館にご来館いただいての相談も可能です。事前にご予約をお願いいたします。